



# T38

胆振西部医師会 御園生 潤  
北湯沢温泉病院

札幌駅の五代目駅舎を兼ねて大型複合商業施設をあわせもつ「JRタワー」がこの3月6日、ついにグランドオープンした。

JRタワーの構想がもち上がったのは、1987年に国鉄の分割民営化によってJR北海道が誕生したのが契機。規制緩和により駅と周辺用地の商業目的利用が、より可能となった。90年には待望の駅周囲の高架化が完了し、人と環境に優しい空間づくりが課題となった。

老朽化した四代目駅ビルが取り壊され、入居していたJR北海道本社が95年に現在の桑園駅前に移転し、巨大な遊休地が生まれ計画が具体化した。JR北海道と大丸は97年、共同で国鉄清算事業団から用地を取得。目玉のJRタワー建設工事は、2000年1月の着工から約3年を要し、工事費は約一千億円。JR北海道の社運をかけた投資であった。

完成したJRタワーは百貨店「大丸札幌店」や商業施設「ステラプレイス」を始め、ホテル、シネコンプレックス（映画館郡）、温泉、オフィスなども備えている。巨大ショッピングモールが札幌駅舎内に出現したことにより様々な波紋を投げかけている。

①札幌市内では、大通地区の商店街が客足を奪われないよう熾烈な争いを行っている。札幌駅～大通駅間の地下街構想も再浮上しているようだ。当面は両地区での綱引きが加速することであろう。

②ホテル業界、映画館も、こうした動きをみこして、老舗の廃業やプライスダウンが相次いでいる。映画館も、家族そろって同じ映画を鑑賞する時代には終止符が打たれる時期が到来したのかもしれない。

③最も深刻な影響を受けているのが近隣の市町村の駅前商店街。ただでも、郊外的大型店に客足を奪われているのに加えて、安価な割引キップで、札幌に客足を奪われ、瀕死の状態である。



①新装なった五代目JR札幌駅南口概観



②観光の目玉、JRタワーの概観

JRタワーの客層の誘導範囲は最小でも片道100kmを予想しているというが、多くの市町村の小売店が打撃を受けている。「JRに、ここまでして欲しくはなかった」と札幌一極集中を批判する地方商店街の悲痛な叫びが少なからず理解できる。「割引キップ」に「臨時列車」を投入しての客足の確保にかけるJR側の意気込みはすさまじい。

オープン初日の来場者数は26万人。予想の15万人を大きく超えた。しかし、事前の周知が徹底していたこともあって、多くの方が公共交通機関を利用し、さしたる混雑もなかったようである。初日は混雑を懸念して開店時刻を約45分くり上げてオープンした。

この施設のメインの一つにJRタワー展望室からのパノラマ展望がある。高さ173m、地上38階からの展望により、好天の日には、小樽方面、恵庭岳などを含めた近隣の風景がはっきりと望まれ

る。有料ではあるが、一見の価値はあろう。夜景も、素晴らしいとの評判である。

現在、消費者の動向は、専門店指向が、ますます加速している。こうした中で、地方の小売店生き残りと共に、札幌地区での客足の争奪合戦は、今後、ますます加速するものと思われる。



③JRタワーからの札幌市内の展望風景写真

## 敦煌への旅

苫小牧市医師会 牧田 茂雄

昨年10月12日から7日間、かねての念願であったシルクロードの敦煌へ行って来た。一行は定員40名満員であった。成田から中国の西北航空で上海、西安を経由してウルムチに着いた。気候は予想よりも暖かく冬支度は不用であった。相変わらず日本人の観光客が多く、砂漠の中のオアシスにある巨大なホテルの宿泊人の8割が日本人であるという。まず目についたのはホテルの名前が金竜大飯店とある。竜はなんと読むのかと現地の日本語の達者なガイドに聞いたら、龍の簡体字で草書から取ったのだという。彼は書道をたしなんでいるので助かった。そう言えば下にGOLDEN DRAGON HOTELとあった。思えば日本でも龍を略して竜と書くのも草書からきている。しかし漢字の国、表形文字の国から楷書行書草書がなくなるのは寂しい。帰ってから草書辞典を幾つか調べたが、なかなか見つからない。やっと習字を続け

ている友人に借りた「五體字類」にあった(写真)。王羲之の書であるが龍全体の草書ではなく偏は龍の音そのままで旁らが宀である。また楷書にも写真にあるように温彦博碑に使われている。龍には古来二種類の字体があったのだがその違いは分からない。また帰りに寄った西安の碑林博物館で買った「蘭亭序」の拓本の袋には「兰亭序」と書かれていた。これで気がついたのは草冠の下に二を書いて蘭の簡体字にしたのは蘭と数字の二との発音が同じだからである。さらに織が纤に、膠が胶になり、ガイドからもらった辞典が「新华



字典」であった、わが国でも同じように草書から當一當、實一実とし、同音の獨一独、嶽一岳、萬一万、臺一台または驛一駅、佛一仏などがあるが使いなれると奇異にも感じなくなるから不思議である。第二次世界大戦が終わった時、中国の共産党政府は煩雑な漢字をやめてローマ字にしようという意見があったという。明治の初期、時の総理の星亨が日本語をやめて英語を国語にしようという提案したことと同じように。

旅に戻って、ウルムチの市内観光の新疆博物館でミイラを見た。紀元前、最古のものは三千五百年前のものであった。その数は二、三体ではなく十体以上はあった。高温と乾燥のおかげで皮膚は黒く、なめし皮のように硬い。髪の毛は生前のままに見えた。年齢も幼児から老人まで、人種もモンゴル、インド、西欧系と様々で身長2メートルの巨人はアフリカ人であった。衣服も様々だが、女の子の着ている毛糸の手編みの上着は今でも着られそうに見えた。

ウルムチからバスでトルファンへ。広大なゴビの砂漠に高速道路なみの立派な舗装道路があるのは、いたるところに石油採掘所があるのでアスファルトには不自由しないからである。トルファンまで3時間見渡す限りの砂漠で人家はなく、所々に枯れたような低い灌木が生えているのは駱駝草という。駱駝しか食べないからだろう。砂漠とはいうが、北方の四千米級の天山山脈から大量の雪解け水が地下水となって流れている。それが所々で地上に湧き出たのがオアシスである。トルファンに近づくにつれて植物が増えてきた。遠くに見える細くて高い並木はポプラとそっくりで、地元でもポプラと呼ぶが北海道のポプラとは全然違う。近くで見ると葉は似ているが幹が白樺のように白い。材質は非常に硬く紫檀、黒檀のように家具の戸棚や仏壇に使われる。大きくて真っ白な戸棚を安くするから買わないかと薦められたが、恐れをなして値段も聞かないで断った。間もなく一面に綿畑が続く。その次には葡萄畑が現れたが、フランスのワイン畑と違ってまことに雑然としてまったく手入れしていない。後で飲んだ現地のワインは旨くなかった。中国では山東省のワインが上等とされている。葡萄の大半は干葡萄になる

が、すべて緑色である。目に付いた植物はそれくらい。動物は駱駝と山羊くらいで、鳴砂山で駱駝に乗せられたが思ったよりずっと乗り心地が良かった。戦時中乗馬をしたが鞍が硬くて尻が痛かったのを思い出した。鳴砂山とはその名のごとく大きな砂山であるが、その砂が非常に硬質な石の砂なので強風が吹くと高い音を発するのでその名がある。夕食後に見たウィグル民族舞踊ショーはとても良かった。ことに女性の極彩色の衣装が新鮮で素晴らしかったのと同じ模様の生地を買ってきた。ショーが終わった後、観客が舞台上上がって綺麗なショーガールとみにくい日本人が混ざってスナップ写真を撮るのはいつもながら不愉快である。私はカメラとビデオを持っているが、美しい景色と建物は撮るが日本人は撮らない。撮るのは好きであるが撮られるのは嫌いである。

翌日高昌故城、交河故城を見たがいずれも砂漠の中の廢墟である。バスの中から火焰山を見たがその名のごとく真夏には気温が80度まで上がり卵を出すとすぐにゆで卵になるという。誰かが鳥が飛んでくると焼き鳥になった落ちてくると言った。ベゼクリク千仏洞はひどく荒らされて仏像も壁画もほとんど残っていない。近くは文化革命の時紅衛兵の若者が来て壊していったという。思えば共産党は宗教を阿片と同じとして否定しているというからか。それではアフガニスタンのイスラム過激主義者と同じではないか。

夜行列車で敦煌へ。座席は二段ベッドであるが広軌のせいかゆとりもあり振動も少なく敦煌まで10時間よく眠れた。始めに行った敦煌故城はよく保存されていると思ったら、十数年前に井上靖の小説「敦煌」を日中共同で作った映画のセットであった。

翌日朝から待望の莫高窟見学である。来てみると以前に写真やテレビで見た外観と異なり、大小様々五百に近い洞窟の総てに丈夫な扉がつけられ施錠されている。「特別有料窟」十カ所を中年女性の莫高窟研究員の案内で回った。紀元前から数世紀に涉って描かれた壁画はいずれも素晴らしい。一部変食したところもあるが鉾石を砕いて使われた青と緑の色は鮮やかで、空を飛ぶ飛天の姿は実に美しい。仏像の容姿は作られた時代によって異

なるがいずれも個性があって立派であり、仏には性がないと言われるがどうしても女性に見える観音様はいずれも若くて美人である。たびたび訪れる平山郁夫が必ず立ち寄りお気に入りの観音像を模写した掛軸が売店にあったので、買ってきて床の間に掛けてある。男性と思われる如来様菩薩様の多くが若くてハンサムなのは意外であった。十数メートルあるお釈迦様の涅槃像の横顔も若くてどこか鎌倉の大仏に似ているように見えた。そう言えば鎌倉大仏も若い、私には童顔のように見えた。わが国の仏様は皆威厳のある成年の像であり、不動明王は恐ろしい顔をしている。ただ広隆寺の弥勒菩薩磐半跏像は例外である。歴史上有名な万卷の仏教の経典を匈奴から守るために、ある僧侶が洞窟の奥に隠していたのが近世になって発見されたという場所を尋ねたら、第十六窟の入口のすぐ右脇の小部屋であったのは意外であった。その経典の一部が大英博物館にあるだけで大部分は散逸してしまったのは誠に残念である。見学が終わると研究員はわれわれを売店に案内して壁画の模写や土製の仏像を見せて、今後の研究に必要な資金なのでなるべく買って行ってくれと言った。

午後空路最後の訪問地西安へ。西安は二度目である。13年前にきた時の静かな唐の都長安とはすっかり変わって、どこの国にもある高層建築と道

路にあふれる車の洪水の近代都市になっていた。例によって秦の始皇帝陵から始まる観光コース。兵馬俑坑博物館は最近もう一カ所の坑がみつかった、騎兵や馬車軍団が見られ大変な人だかりであった。楊貴妃の別荘の華清池には新しく真っ白な大理石像が建てられていた。前回見落とした碑林博物館は見ごたえがある。古来の詩文を刻んだ巨大な石碑を集めて並べて林の如く、その間を眺めながら歩くのは圧巻であった。石碑に紙を張って拓本を作る実演も見せてくれる。王羲之の集字聖教序と蘭亭序、欧陽詢の九成宮醴泉銘の拓本を買った。聖教序は広げてみてその大きいのに驚いた。測ってみると縦横2メートルと1メートル弱あり畳一枚より一回り大きい。習字の手本の和綴じのものはほんの一部に過ぎないことが解かった。大きすぎて掛軸にはならないが、表具屋に裏打ちだけしてもらった。夜に西安名物の餃子料理を食べた。20種類の餃子が出るのだが、ようするに魚から肉から野菜から果物までなんでも入っているだけだが一口くらいの小型なので食べられる。案外旨かった。

7日間の旅を終えて乗り継ぎの上海空港の廊下を歩いていたら、扉に「拉」と書いてあるのが目に入ってぎょっとした。よく見ると下にPullと英語で書いてあった。

## お知らせ

# 北海道医報発行回数の変更について

◇広報部◇

平素より北海道医報の刊行に際しましては、特段のご高配を賜り誠にありがとうございます。

さて、北海道医報は、会員に対する広報活動・情報伝達手段の一つとして、従来、年23回発行しておりましたが、平成15年度より年12回（毎月1回）の発行に変更することといたしました。

近年、広報・情宣活動は益々重要になってきておりますが、今後はインターネットによる情報提供の充実、さらには種々のメディアを活用

しながら、住民・マスコミ・行政などに対しても医師会活動、医療問題に対し理解を得られるような広報活動を図ることとしております。

発行回数の変更についてご理解賜りますようお願いいたします。

つきましては、前号でお知らせいたしましたとおり、今号から、月1回の発行により毎月1日号としてお届けいたします。

今後とも引き続きご愛読くださいますようよろしく願いいたします。